

紙別 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 乙 第	号
------	-------	---

氏 名 清瀧（鈴木） 裕子

論 文 題 目 大学生女子におけるアレキシサイミア傾向と摂食障害との関連－メディアの影響および個人特性を媒介として－

論文審査担当者

主査	名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	本城秀次
	名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	森田美弥子
	名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授	金子一史

論文審査の結果の要旨

近年、青年期女子における摂食障害や食行動異常の増加が問題となっている。これまでの研究では、摂食障害や食行動異常には、やせていることが美しいとする社会文化的価値観、個人のパーソナリティや特性、親子関係や友人関係など、多くの要因が関係しているとして検討がなされてきた。その中で、感情の特定と表現の困難、情緒的興奮における身体的感覚と感情との区別の困難として定義される (Taylor, Bagby, & Parker, 1997) アレキシサイミアは、摂食障害との関連が指摘されていたものの、これまでほとんど他の要因と合わせて複合的な検討はなされてきていない。本論文では、摂食障害の重要な背景要因の一つとしてアレキシサイミアに焦点を当て、社会文化的要因及び心理的要因とどのような関連をもって摂食障害に影響を及ぼすのか、調査研究を行うことを目的としている。

本論文は 7 つの章から構成されている。

第 1 章では、摂食障害の歴史を概観し、症状および臨床像、診断基準について記している。さらに、摂食障害の影響要因として取り上げられることの多い、社会文化的要因、心理的要因、友人関係・家族関係などの対人環境的要因の 3 つの視点を中心にこれまでの研究を概括している。

第 2 章では、摂食障害の特徴の記述において、感情の抑制、感情表出の乏しさなど、感情の統制の過度な強さの問題が指摘されている点から、摂食障害の背景要因として、アレキシサイミアが考えられるのではないかと指摘している。そもそも、人間が情動・感情を内界で取り扱い、適切に処理していく過程には、感情認知における言語の働きが指摘されている (Krystal, 1979; Stern, 1985; Taylor et al, 1997; 清瀧, 2007)。言語には、内的に起こってくる興奮や情動の高まりを、「怒り」「不満」などの感情であると同定し、ラベリングして認識することによって、興奮や感情の起伏を自己内界に収める働きがある。しかし、自身の感情を認識し、同定し、表現することが困難なアレキシサイミア傾向の人は、自らの感情状態を正確に認知することができず、生じた情動に適切に対応できないため、不適切な衝動的行動をとる傾向があることが指摘されている (Fahy & Eisler, 1993; 清瀧, 2008)。これらの指摘から、摂食障害や食行動異常に見られる異常な摂食行動やそれに関連した症状は、不快な感情状態を何とかして再び自己制御できるようにする試みではないか (Taylor et al., 1997) との考えのもと、摂食障害の背景には、アレキシサイミアが関与しているとの視点に立ち、アレキシサイミアの概念およびこれまでの研究について概観している。

論文審査の結果の要旨

第3章では、本研究の意義および目的について記述している。摂食障害は、近年の発生および増加の特徴から社会文化的要因および個人のもつ特性の影響は無視できない。加えて、その臨床像や発生機序から考えると、アレキシサイミアは摂食障害の重要な背景要因であると考えられる。本研究の目的は、これらの要因がどのように摂食障害に影響を及ぼすのか検討することである。

第4章では、食行動異常と、アレキシサイミア傾向、メディアに対する被影響特性、瘦身理想の内面化、他者意識との関連について、大学生女子を対象におこなった質問紙調査をもとに検討をおこなっている。これまでの摂食障害における研究で、「やせていることは美しい」とする社会文化的価値観は、主にメディアを通じてもたらされることが指摘されている。そのため、メディアの影響について、個人がメディアに接する頻度と、メディアからの社会文化的価値観の取り込みに影響を及ぼすと考えられる個人特性（メディアに対する被影響特性・瘦身理想の内面化・他者意識）、そしてアレキシサイミア傾向から、青年期女性における摂食障害傾向との関連を検討した。その結果、食行動異常にはアレキシサイミア傾向に加え、他者意識、メディアからの被影響特性、瘦身理想体型の取り入れが影響を及ぼすことが明らかとなった。さらに、アレキシサイミア傾向の中でも、特に感情同定困難の傾向が強いと、他者の外見に対する意識、メディアからの情報や瘦身理想を取り入れる傾向と結びつきながら、ダイエット行動や過食・食べ物への執着の傾向が強まる傾向が示された。

第5章では、「やせていることは美しい」とする社会文化的価値観を取り入れ、やせていることは、女性、特に摂食障害や食行動障害を呈す女性にとってはどのような意味を持つのか、どのような意識からやせようとし、摂食障害や食行動障害につながるのかとの視点から、食行動異常と、アレキシサイミア傾向、社会的承認欲求、女性性受容との関連について、大学生女子を対象に実施した質問紙調査をもとに検討をおこなっている。その結果、アレキシサイミア傾向の感情同定困難は、拒食行動および過食行動にかかわらず、食行動異常全般に直接影響を与えることが示唆された。食行動異常それぞれについて検討すると、ダイエット行動には、感情同定困難に加え、社会的承認欲求および女性性受容が影響を及ぼしていることが示され、体重を減らすこと、やせていることに対する社会文化的圧力が、青年期の女性にとって、ダイエット行動や食行動異常の要因となっている可能性が示唆された。一方、過食行動や食べ物への執着は、感情同定困難および社会的承認欲求が関連を示し、女性性受容との関連は示されなかった。これは、自身の感情を同定することが困難であることに加え、周囲から認められたい欲求が高いと、否定的感情を適切にコントロールし、適切な形で表出することが難しく、その結果、自身の内部に生起してくる否定的感情を、過食という行動化によって表出することによって、なんとか感情をコントロールしようとし

論文審査の結果の要旨

ているという関係があるのではないかと推測された。

第6章では、EAT-26のカットオフポイントを用い、対象者を食行動重度障害群、食行動中程度障害群、食行動正常群の3群に分け、アレキシサイミア傾向、他者意識、メディアからの被影響特性、メディアへの接触頻度、BMI、理想と現実との体重差、社会的承認欲求、女性性受容において、食行動障害の重症度別にどのような違いが見られるのか検討した。その結果、感情同定困難においては、食行動重度障害群が食行動正常群および食行動中程度障害群よりも有意に得点が高いとの結果が得られ、食行動障害の傾向を示す人は、特にアレキシサイミアの中核的問題である感情同定困難に差がみられることが示唆された。他者意識においては、3つの下位尺度すべてにおいて、食行動障害群間のいずれかに有意な差がみられ、食行動障害にある人は、正常な人に比べ、他者に注意を向けやすい傾向をもっていることが示唆された。メディアに対する被影響特性においては、食行動重度障害群・食行動中程度障害群が食行動正常群に比べ、有意に得点が高く、瘦身理想の内面化においては、3群間で有意な差がみられ、障害の程度が重くなるほど、その得点が高くなる傾向が見られた。この結果から、食行動障害のある人は、マスメディアから、理想体型やダイエット行動について情報を取り入れ、影響を受けやすい傾向にあること、また、タレントやモデルの瘦身を理想化している傾向である瘦身理想を内面化している傾向にあり、食行動が重度であるほどその傾向が強いことが示された。一方、BMIおよび理想体重差には有意な差はみられなかった。以上より、食行動異常には、実際の体型や理想とする体重とのギャップといった体型に関する意識、メディアへの接触頻度といった実際的な要因が影響を及ぼすのではなく、他者からどう見られているかという意識や、自身の感情をどのように制御できるか、メディアから情報をどのように取り入れ、どのように価値観を内在化しているかといった個人特性などの、心理的側面が影響を及ぼしていることが示唆された。

第7章では、本研究の結果をまとめ、総合的考察をおこなっている。まず、本研究を通じて、食行動異常のうち、拒食症につながるようなダイエット行動と、過食症につながるような過食・食べ物への執着には、幾分異なりはするが、同じような要因が関連することが示された。このことから、食べることやそのコントロールにまつわる行動の問題には、程度の差があるとはいえ、共通する要因が背景にあることが考えられた。また、感情同定困難が、食行動異常のすべての下位尺度に対して、直接ないしは他の変数を媒介しながら関連を示す結果となっていた。このことから、感情同定困難、つまりアレキシサイミアの中核的な問題である自分自身の気持ちが明確にとらえられない傾向が、食行動障害のどの側面にも結びついていることが示唆された。さらに、やせていることが美しいとするメディアからの圧力にさらされ

論文審査の結果の要旨

ている中であっても、また実際の体重や、理想とする体重との差の大きさがどの程度であっても、それ単独では食行動に障害をもたらすとは考えにくく、むしろ食行動に障害をもたらすのは、メディアからの圧力や自分の体重・体型を、個人がどう受け取るか、どう意識するかという心理的要因が強く関与していることが今回の実証研究で明らかとなった。しかし、本研究の限界としては、調査対象者が一般大学生女子であったこと、質問紙法でのアプローチだったことがあげられ、今後、摂食障害臨床群や、より幅広い年齢の対象者における検討、さらに、面接法等を通じてより詳細な検討を行うことが必要であると考えられた。

本論文のこのような結果に対し、審査委員からは以下のような疑問や問題点の指摘がなされた。

- ① ここでいう摂食障害の定義についてももう少し詳細に述べてほしい。
- ② 摂食障害をスペクトラムで考える考え方は理解できるが、ここでは、一般青年を対象にしているのか、早期の摂食障害にアプローチすることを目標にしているのかももう少しはっきりさせてはどうか。
- ③ メディアの影響をどこまで中心的な要因と考えているのか、もう少し明確にしてほしい。
- ④ EAT-26は第6章では独立変数として扱われているが、他の章では従属変数として扱われている。この点で矛盾はないか。
- ⑤ アレキシサイミア概念が十分な説明なしに突然用いられている感があるが、この概念は扱いに難しいところがあり、もっと緻密な取り扱いが必要ではないか。
- ⑥ 総合考察で、摂食障害の低年齢化に対する予防的アプローチに触れているが、本論文では必ずしもそこまで述べない方が良いのではないか。

このような指摘に対し、申請者の応答は適切であり、この論文の限界、今後の課題等について十分に認識していた。

さらに、本論文は今日顕著な増加傾向を示している青年期の摂食障害の要因について示唆を得るために、正常青年を対象にして、心理社会的要因に関して包括的な研究を行い、摂食障害の要因についてこれまでの研究の意義を明確化するとともに、摂食障害に対するアレキシサイミアの役割について興味深い結果を得たことは十分評価できるものである。

以上のような結果より、審査委員は全員一致して、本論文を「博士（心理学）」の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。